

池田小菊関連書簡

— 志賀直哉未発表書簡を含めて —

弦 卷 克 二
吉 川 仁 子

はじめに 池田小菊について

志賀直哉が、友人である画家・九里四郎に勧められて奈良に居を定めたのは、大正十四年四月のことである。奈良での最初の住まいは奈良市幸町であったが、のち、昭和四年四月、奈良市上高畑に家を新築して移り住み、その上高畑の家で『暗夜行路』を完成させたことはよく知られている。そして、昭和十三年四月、

「奈良は美しい所だ」「名画の残欠が美しいやうに美しい」（「奈良」昭和一三・一）と、奈良に深い愛着を残しながら奈良を去るまでの十三年間、志賀のもとには、多くの文学者、画家が集まり、特に、上高畑の家は、「奈良在住の画家人たちの寄り合ひ場所の観を呈する」（阿川弘之『志賀直哉』上 一九九四・七 岩波書店）ほどであった。奈良の志賀邸を訪れた人々としては、武者小路実篤、瀧井孝作、尾崎一雄、小林秀雄、舟木重雄、島村利正、網野菊ら

の名前がすぐに挙がってくるだろう。また、小林多喜二が非法下に一度だけ来訪したことも、志賀が多くの文学者から信奉された証左として、よく伝わるエピソードである。そのように志賀を訪ねた一人に、池田小菊という作家がいる。

志賀の「続創作余談」（昭和一三・六）の中に、次のような一節がある。

「犬」これは岡本に谷崎君を訪ね、一緒に神戸に出て、其所で買つて帰つた犬だが、或時あなくなつて、それを尋ね出した事をそのまま書いたものだ。「週刊朝日」に出ると、間もなく奈良県の警察部の人を訪ねて来て、私は大変礼を云はれた。巡查が私に親切だった事を書いたので、それを時の警察部長が喜んでくれたのだ。

何年か経つた。私の所に始終来る女流作家の池田さんが赤に金を百円とか出したといふので警察へ曳かれた事がある。

皆心配した。私も心配して既に夜十時過ぎてゐたが、警察署長の官宅へ弁明に行つた。その署長といふのが、前に「犬」

で、私の所に礼に来てくれた人だつたので、話は大変好都合だつた。夜一時頃池田さんは許され、私の家へ礼に来た。

「犬」はかういふ妙な事に役立つた作品だ

「犬」『週刊朝日』昭和三・一）は、作品中の地名を追うと、奈良の人間なら、炎天下に犬を探し回つた作者の苦勞が自然思ひやられる作品である。奈良の町を舞台とするこの作品に関わつて、

「私の所に始終来る女流作家の池田さん」と紹介されているのが

池田小菊（一八九二・三・一五〜一九六七・三・九）である。池田小菊は、和歌山県出身、和歌山師範学校を卒業後、大正十年に奈良女子高等師範学校附属小学校訓導となり、パーカースト女史のドルトン・プランの実践や、合科学習教育に取り組むとともに、大正十五年には当時奈良に住んでいた志賀に師事、昭和十三年には「奈良」『文学界』昭和一三・一二）で第八回芥川賞候補になる（この回、中里恒子が「乗合馬車」で女性初の受賞者となっている）。戦後は、上司海雲と共に雑誌『天平』を創刊、また、婦人会活動にも邁進するなど、多面にわたつて活躍した女性である。彼女は、奈良女子大学に隣接する奈良市鍋屋町三番地に生涯住みつづけた。

小菊が幸町の志賀を初めて訪ねたのは、大正十五年一月十八日、

講演の依頼のためであった。講演は断られるが、翌日、志賀の子供の家庭教師になることを手紙で申し出て了承され、その後、二度、志賀宅を訪れ、家庭教師をするようになる。昭和三年に奈良女高師附属小学校訓導を退職後は、志賀の門下で本格的に小説修行をし、志賀宅を度々訪れ、また、志賀が他の門下とともに小菊宅に立ち寄ることもあった。「続創作余談」中の小菊が警察に拘引されたエピソードは昭和八年八月十八日のことで、八月十七日の志賀の日記には「湯浅検挙の事自分の名もあげて読売に出てゐる、池田相談に来る、（湯浅よし子に池田百円やつた事）」、八月十八日には「池田午后警察に呼ばれ家宅ソーサク、夜留守宅を見舞ひ、警察署長から電話でその官舎に行き会ひよく話す、中川といふ人前に幸町の家に来た事あり、自分の話よくきいてくれる、一時過ぎ池田来る、滝井来る、若山、加納、中村等来る、」とある。宮本百合子と共にモスクワに滞在したこともあるロシア文学者・湯浅芳子に百円貸したことになる共産党への資金提供の嫌疑を受けたのである。この事件について、小菊は遺稿「小説の神様」『関西文学』昭和四七・五）の中に、「當時有名だった東京の或る女闘士」が「東京へ帰る金もなくなつたからと、百円借りに来た」ので持たせたと書いてゐる。また、この作品によると、志賀のとりなしで釈放された後、礼に行つた小菊は、志賀に、「今後は注意

するんだ」と、「笑ひながらであったが、大きい声で頭から一口に叱りつけ」られたが、無事釈放された祝いと今後の激励の意をこめて、酒器を贈られたという。他にも、小菊は、昭和十二年の年末、志賀が奈良を引きあげる直前に、志賀の高畑の家を買いいたという人物を仲介するなど、志賀及び、その一家と親しい交流を持った人物であった。

奈良女子大学は、平成十六年七月に、作家、画家であり、池田小菊の研究者でもある武田好昭氏（筆名 生田幸平氏）から、池田小菊に関する資料の保管を依頼された。平成十七年五月、依頼された資料と、その後の調査で知りえたものなどの一部を、奈良という地域や人々と深く関わらせて展示することを試みた。その展示の企画の段階で、和歌山県有田市の有田市文化福祉センターに保管依頼されている、小菊の御養子である池田直氏の所蔵する小菊関係資料も調査させていただいた。

池田直氏所有の資料のうち、書簡類には、志賀直哉差出のもの、志賀康子差出のもの、網野菊差出のもの、小菊の未投函書簡などがある。志賀直哉差出のはがき三通と書簡一通は、最も新しく編まれた『志賀直哉全集』（全三巻、岩波書店、以下、全集と呼ぶ場合はこれを指す）に未収録の資料である。網野菊との間にやり取りされた書簡は、同じ志賀門下で文学を志すもの同士の親交を窺わ

せる。志賀康子の書簡は、小菊と志賀家との親交を窺わせると同時に、志賀家の交際を切り盛りする康子の存在の大きさを示すものとなっている。それぞれ興味深い資料であり、以下、有田市文化福祉センター寄託資料の内、書簡類に焦点をあてて紹介する。

一 志賀直哉の池田小菊宛書簡（全集未収録）

池田直氏所有の志賀差出の書簡は全集に未収録である。以下、紹介する。

①昭和十八年十月二十五日付はがき差出人東京世田谷区新町

二ノ三七〇志賀直哉

色々御世話になりました、一週間の旅気持大分落ちつきました、東京は矢張り何となくあわだしい気分があります、拝借の風呂敷洗濯もせず早速お返し致します、ごたくしてゐるので康子忘れたり失ったりしうなので、そのまま直ぐ御送り致せました、かづえさんによろしく、

志賀は、昭和十八年十月十六日から二十三日まで京都、奈良に旅行している。十月十八日付康子宛はがき（1513番、これは全集所収の書簡につけられた書簡番号を示す。以下同じ）に、「昨日桂離宮拝観、今日修学院を見て、一人奈良に来た」、翌十九日付康子宛（1514番）

には「何となくノンビリする」「服部君と上司君を訪ね晩は純一君も一緒に池田さんを訪ねた」とあり、小菊宅を訪れていることがわかる。全集では、十月二十四日付上司海雲宛の、奈良でのものと土産に対する札状(1516番)がある。その後、二十四日付溝井勇三宛(1517番)、二十五日付滝井孝作宛(1518番)の通信が続き、その二通は溝井が送ってきた小説の采配に關してのもののだが、どちらにも京都奈良の旅に出ていることが添えられている。この①も海雲宛と同様、旅の札状で、日付から言って、滝井宛(1518番)の前に位置するはがきである。「かづえさん」は小菊の父・池田利助の友人である木村伊兵衛の、二女・木村一枝で、小菊の同居人である。昭和九年に小菊の養女として入籍する。昭和三十五年一月、六十五歳で死去する。一枝の名は、後に紹介する網野菊、志賀康子の書簡にも出てくる。

②昭和十八年十二月二十八日付絵はがき(史蹟熊本城) 差出人熊本県天草下嶋下田温泉望洋閣志賀直哉

いつも色々お世話になりありがとう、大阪から別府までは大変な人でしたが、あとは気楽な旅をしています、今日天草へ渡り上記のところへト先づ落ちつきます、本と原稿紙お送り願ひます、原稿紙のシンに鉛筆二三本入れてあるかも知れ

ませんがそのまゝで送つて下さい、

③昭和十九年一月九日付はがき差出人長崎市炉粕町諏訪莊志賀直哉

一昨日天草から此所へ来ました、池田さんのいはれたやうに二ヶ月が二十二日で帰宅といふ事になりました、然し大変面白い旅であとまで色々憶ひ出す事があるだらうと思ひます、長崎三泊、こゝも明治時代の空氣残つてゐる感じで氣に入り、つてゐます、本と原稿紙は東京へお送り願ひます、

全集の年譜によれば、昭和十八年「十二月下旬より翌年一月にかけて、若山為三と関西から別府、熊本、天草、長崎への旅に出る」とあり、書簡で昭和十八年十二月二十二日より奈良、二十六日別府、二十七日熊本とその足跡が辿れる。全集には十二月二十八日付池田小菊宛絵はがき(1531番)があり、そこには「前便で下田望洋閣へ落ちつくやう書きましたが急に上記のところへ場所変更しましたから本と原稿紙はその方にお送り下さい／万一又変更の場合は電報うちますが電報なければ其所へお願ひします、／かず江さんによろしく、若山君には大変世話になつてゐます、」とある。従つて②のはがきは、全集1531番のはがきの直前に出されたものであることがわかる。③のはがきの翌日十日、長崎を立ち、東

京までの二十二日間の旅は終わる。この九州の旅については、『美術雑誌』『美術』昭和二〇・二一の中に触れられている。

④昭和五年八月二日付手紙差出人東京市青山南町六丁目一〇八

志賀直哉

前略お変りなき事と思ひます私達は二十八日函根へ参りましたそして私だけ今東京に来て居りますそれからこれは少し申上げにくい事ですが此九月から田中さんお断りしたいと思ひますが如何ですか田中さんの人がらは極く無邪気で私も好きですが一切安心してお任せして置くには露骨に云へば少し不安を感じるので私一人の考へでお断りしたいと思ひ(ます)康子は私がこれを云ひ出したので切りに閉口し、自分の方の子供がまるで不成績でゐながらなど申し殊に田中さんとは個人的に馴染深くなつたので此事洩つて居りますが私が承知しないのでどうか不悪人柄は無邪気で氣持明るく大変いゝので(す)から申すのは心苦しいのですが何卒不悪後の事は若山君を介して谷山君(師範の画の先生)に頼みました所康子の不服で若山君もそれでは話を止めて置かうといふ事になつて居りますそれで池田さんの御返事頂いて改めて若山君に頼まうと思つて居ります函根は神奈川県函根強羅志賀別荘です私

は三日程して又むかうへ帰ります用事早々
八月二日

池田小菊様

志賀直哉

この手紙では、子どもたちの家庭教師のことが話題になっている。昭和五年八月六日付若山為三宛書簡(797番)は、函根強羅から出され、「池田さんに手紙を出したのでどうか谷山君の事お願ひします、九月からといふやうだと都合です」という言葉が見える。この若山宛797番の直前に④が位置するものと考えてよいであらう。また、昭和五年九月五日付の相原菊子(網野菊)宛書簡(799番)には、次のようにある。

子供達余りに学校が出来ないので少し不安になり私が憎まれ者になり、家に来る先生を男の若い人にかへもう少し勉強させる事にしました、前に来てゐた田中さんといふ女の先生大変いゝ、呑気な人ですが断り、その為池田さんにも迷惑をかけ氣の毒でした、然し子供の為めさうする方がいゝので仕方ありませんでした、「康子は田中さんとの親みから此事賛成しませんが私が承知しないので、どうか不悪」といふ手紙を私から池田さんに出した所私と康子と意見が分れてゐては

何方に味方していゝか分らぬといふ問合せの返事が来て困りました、然し池田さんには近頃好意を持つてゐます、此間から二度程麻雀をしました

家庭教師を巡る一連の手紙、志賀と小菊との間の距離感を伝えて、興味深い。この後紹介された、右の引用中で言う「男の若い人」が、「青臭帖」(昭二・四『中央公論』)の「鬼の耳は赤い」に登場する「〇君」こと大富登である。

二 池田小菊の志賀直哉宛書簡

①昭和二十二年七月四日夜付(封筒なし。未投函のものと推定。) 瀧井さんの事、押し強く申し 先生に口答へするやうで悪いと思ひながら、仕事をしてゐましても先生のお手紙の御文面頭に浮び 今日もまだ 氣持落ちつきませんので もう一度書かせて頂きます このお話 瀧井さんが本当にさう仰有つたのでございますか、それとも先生の御推察が主で、御立腹は瀧井さんでなく 先生でございますか この点はつきりさせて頂きたく存じます 田中さんに電話できゝました、企画書類も係のものにしらべさせました、が、「対談日誌」は最初からの企画で中途で変更してゐないことは事実でございますし、瀧井さんもそれを御承知で御立寄^{立寄}下さつて御承諾にな

られ、「対談日誌」だけ別に原稿紙に浄書して御送り下さつたことにも間違ひございません。また、前便でも前々便でも申上げ、瀧井さんからのお手紙と瀧井さん御自身お選びの目次も同封お目にかけましたやうに、内容も決して無断できめたものではございません。それで、今になって先生から題名を変へよと仰せられましても、あの書物で変へる別の題名がございませんから、変へさせることが当然出版中止にさせなければならぬわけでございますが、さういふこと本当に瀧井さんが仰有つたのでございますか、責任の所在をはつきりさせて頂きたく存じます 「僕でも瀧井でも芸術創作に専念してゐるもので、本屋雑誌屋の御用をつとめる事を仕事にしてゐるものでありません」と先生が仰有るやうに、私も本屋の番頭ではございません。私が 本屋から月給や口銭をとらない理由はそこにございまして、私が本屋とグルになつて 先生や瀧井さんを文筆業者扱ひできる人間でございましたら、二十五年一日の如くこんな露地裏住居に満足致して居りません。ですから、私は、自分から頭を下げて原稿を頂いて居りますのは先生御一人だけで、他の誰にもそれは致して居りません。私が月給を一年きりで断つたのも、「天平」の編集費用さへ編集手当の形で受取ることを断つたのも、本屋に雇は

れることになるのが厭だつたからでございます。働いても働

いても私の暮しが楽にならない理由もそこにございまして、

これは私の生れ性、心の誇でございます。私は瀧井さんに前後三回手紙を書き、四十余篇の原稿を全部よませて頂き、製本から印税の事にまで責任を持たうといたしましたのは知人への礼で、企画者菅さんが在勤いたして居りましたなら私がこんなにこのお話に深入りいたしてゐなかつたと思ひます。かういふはつきりした事にも「無限抱擁」傑作の故を以つて尚且つ私が泣寝りしなければならぬとしたなら、私は何を信じればよいのでございませう。瀧井さんともある人が、かういふ無責任な放言をして人をさわがせるといふ事。それが瀧井さんであればあるだけ私は実に不愉快でございませう。先生も「斯様な話をきいたが事実か、事実ならば以つての外だ」と、人を叱るにもその者が思のつける窓をあけてやつてそしてお叱りになれなかつた事、私の誠実に対して少し程度を越えたお叱りやうでなからうかと申し上げたい気がいたしますのは私の生意気でございませうか。先生はお手紙田中さんにも見せよとの事でございますが、こんなひどいお手紙他人には見せられません、校正のことだけ申しておきました

四日夜

志賀直哉先生

小菊

問題の本は、滝井孝作『志賀直哉対談日誌』（昭和二年・七、全国書房）である。小菊は、全国書房創業者の田中秀吉から請われて、その顧問を務め、後に紹介する女流作家叢書を始め、出版企画にも関わっている。昭和二十二年六月十七日付の志賀の小菊宛書簡（183番）が事の発端であるが、志賀はその書簡で、「今度の随筆集滝井に無断にて選び」「題名までも相談なく決めて了つたとの事、一寸常識では考へられぬ乱暴に驚き、且つ腹を立てました」「それから、滝井の随筆集の題名と選んだ内容が、私に関するものが大体だと聞いて実に不愉快な感じがしました」「何故滝井に選んで貰はなかつたのですか、何故私に關したものをばかりを選んだのですか。それを私が喜ぶと思ひ、それが私に対する好意だと思ふのは実に私をも滝井をも知らぬものです」と厳しい調子で書いている。六月三十日付（186番）で、この事件に関して、「私が気が早かつた事、お詫びします」と、志賀の詫び状が小菊宛に出されている。従つてこの七月四日付の①の書簡はおそらく投函されずじまいだったと考えられる。

志賀が怒った小菊の志賀に対する「好意」のありようについて

は、これに先立ち、小菊の「断橋臥柳」(『群像』昭和二・一〇)というエッセイをめぐっても、行き違いが起きている。「断橋臥柳」とは、元代の画家・倪雲林の「断橋無復板 臥柳自生枝」の軸の句で、その出典は杜甫の詩である。昭和二十一年六月六日から七月二十日まで、志賀直哉が「天平の会」の招きで上司海雲の東大寺観音院に滞在した折、小菊が志賀にこの句を書いてもらった。その書は現在、池田直氏が所蔵されて残っている。志賀に字を書いてもらったその経緯を記したのが『群像』の「断橋臥柳」である。このエッセイには、敗戦後初めての志賀の来寧を喜ぶ小菊の高揚感が強く感じ取れる。それだけに、志賀にしてみれば、「少しヒイキの引倒しで閉口」(昭和二・二・一付 上司海雲宛書簡 1820番)させられ、「群像」の文章には池田さんの御好意が余りに露はに出てゐる事気になり、御注意したい」(昭和二・二・二三付 池田小菊宛書簡 1828番)と思わされるものであり、「雑誌は兎に角、所謂天下の公器なのだから、それに私情をああいふ風に盛込む事は悪いと考へてゐます」という注意を書き送っている。「私は作品に私的要素を最も盛込む方で、その悪影響もあるかも知れませんが、私がそれをやるのは私事の如くして必ずしも私事でない要素を含まれてゐる場合を書いてゐるつもりです」とも述べ、小菊の書き方が志賀の文学観に抵触する問題であつたことがわか

る。

志賀は、『志賀直哉対談日誌』に関わる揉め事の直後の昭和二十二年七月五日付上司海雲宛書簡(1870番)で、小菊の執拗さを「鈍刀を振り廻はされるので試合の勝手がちがひ具合が悪く」と語っている。先に掲げた小菊の未投函書簡からは、事実に相違したことで志賀に叱られた小菊の、押さえきれない憤懣がよくわかる。同時に、師である志賀に対しても、自分の意見を曲げない、小菊の頑固さもよく表れている。ここには、「志賀門下」と、ひと口に言ってしまうえない、志賀からの距離感―これは、志賀の側からの距離感でもあるが―が、窺える。

三 網野菊の池田小菊宛書簡

①昭和十三年十月十四日付差出人東京都杉並区高円寺七ノ

九九八網野菊

昨日病院へ行く途中、神田で「文学界」を買ひ、電車の中で一と先づ、拾ひよみをし、それから帰宅後、昨夜は疲れてゐたので、そのまゝにして、今朝、拝見し直しました。大変、力のこもったお作で、私にとって、よい刺激となりました。私は、自分の、小っぱけな勉強の仕方が恥づかしになりました。た。丁度、私が、先日、小林秀雄氏に送った原稿といふのが、

「犬の話」といふのですが、私は、あなたの、この「奈良」を拝見し、あなたが、「犬」を見ぬいて見ぬいてゐらっしゃるのを感じて、自分の「犬の話」が恥づかしになりました。

「奈良」は、力のおふれた、そして、題材も変つてゐて、大変面白い、お作だと思ひました。いつか、千ヶ滝で拝見した（御発表にならない）お作にも大変感心しましたが、今度の「奈良」は、私には、かへつて、昨年の「財布」（あの月、徳田秋声氏の作につぐ傑作といふ評のあった）よりも心をうたれました。あなたのこれまでの、いろいろの御苦労、御苦心も決してむだに終らなかつたといふことを感じました。（甚だ、せん越な云ひ方で、おゆるし下さい）。あなたの個性をあくまでもおのびしになつて、ぐんぐん書きつゞけになるよう、に、（こんなこと、今更、私が申上げるまでもないことですが）と思ひます。「奈良」を拝見して、大変、私は、自分の勉強の足りなさを、生活態度を反省させられました。なんだか、ガクンと、頭を金づちでぶたれたやうな感じです。大変、いいお作だと思ひました。私は、何事についても自分の心のうちこみの足りなさを恥づかしと思ひましたが、併し、かういふ反省の機会をあたへられたことは、やはり、感謝すべきだと思ひました。どうぞ御健康をお大事に、次ぎぐと、よいお作拝

見させて下さい。いつかの、「鳩」も、大変よいお作だったと、今でも思つてゐます。一枝さんよろしく。

九才になる末妹、先日來、学校で右腕をくちいて來て、家に、ずっとゐるので、何かと、私が、勉強相手やら、遊び相手やらにかりたてられます。私は、なんだか、ズツと、小きざみな生活ばかりして來たやうな氣がして、いやな氣持がします。併し、それも、一つには、私の性格のしからしめる所で、仕方がないのでせう。

「奈良」には、感心しました。くはしく、こまこまとは、今、云ひ得ない氣持なのですが。いづれまた改めまして。右、と、りあへず、申し上げます。

十月十四日

網野 菊

池田小菊様

御人々

「溪あひのかげみづみづし九輪草」大変よい御句と感心しました。他の御句作も拝見させて下さい。

小菊の「奈良」は、『文学界』昭和十三年十一月号に発表された。それを讀んですぐ網野が送った手紙である。「奈良」は志賀

直哉が奈良を去る頃の小菊の周辺を描いた私小説である。小菊は、姉・とよが死んだ昭和九年頃から犬を飼い始めた。同居人の一枝も犬を飼うことに熱心になり、「奈良」執筆当時は四匹の犬を飼っていた。作品にも、犬を通じての志賀との交流や、飼い犬に振り回されながらも犬への愛情が捨てきれない主人公が描かれている。「溪あひのかげみづみづし九輪草」の句も「奈良」の中に登場する。作品によれば、志賀が発つ際に「特別な関係の者だけ」「画帖と写真帳を贈ることになり、一筆揮ったのがこの句であった。「九輪草」は、小菊が志賀に株を分けてもらったことのある花で、小菊はこの花を好み、未発表原稿のタイトルにもしている。また、小菊の死後、昭和四十六年三月九日に、小菊会によって、小菊が生前好んだ菩提山正暦寺の境内に碑が建てられた。その碑には「九輪草枯れず 池田小菊」と刻まれている。

右書簡中、「財布」とあるのは、昭和十二年九月『改造』に発表された「札入」の誤りと思われる。小菊の遺稿「小説の神様」によると、志賀は、昭和十二年に「良いことが三つあった」と言い、自分の全集が出たこと、尾崎一雄が芥川賞を取ったこと、小菊の作品が『改造』に載ったことの三つを挙げたという。改造版『志賀直哉全集』（全九巻）は昭和十二年九月から刊行開始。尾崎一雄は『暢気眼鏡』で昭和十二年七月、第五回芥川賞を受賞して

いる。網野が「徳田秋声氏の作につぐ傑作といふ評」として触れているのは、『新潮』昭和十二年九月掲載の名取勘助「小説月評」である。

「鳩」は昭和十一年八月、小林秀雄の推薦で『文学界』に発表された作品である。文中にある網野が小林秀雄に送ったという「犬の話」は、『文学界』昭和十四年三月号に掲載されている。

②昭和十八年十二月六日付差出人東京、麹町区四番町一番地
ノ二網野菊

御ぶさた申上げて居りますが、その後、いかがおすごしでいらっしやいますか？

一様も御きげんよくおすごしでいらっしやいますか？

今日は、御高著「奈良」御恵送いただきまして、まことにありがたう存じました。よき御出版のおよろこび申し上げます。御装幀も大さう高雅で、大変よろしいと存じました。一昨日、久しぶりに神田の本屋街にまわりました所、御本は、大変、目立ちました。殊に、三省堂の新刊本の陳列戸だなの中にある御本は、大変よく、まことによく目立って居りました。扉の犬の絵も、いかにも御愛犬を思ひ出させ、私でも、なつかしい気がいたします位ですから、あなたは、どんなにか、

よい御思ひ出として、御満足の御ことかと存じます。

「財布」が収められてゐぬことは残念ですが、今日のやうな時代ですから、いろいろと、御刊行には、御面倒もおありのことと存じます。併し乍ら、かうして、御本になりまして、本当によかったと存じます。だんく、単行本のごときは、むづかしくなります折柄、一層――。

「縁」は、今度はじめて拝読するのですが（お雑誌の折、拝読いたしそびれましたから）、あとの三つのお作品も、改めて拝読たのしみでございます。

どうか、くれぐれも御身御大事に、御健康御注意下さって、更に、次ぎくと、御力作拝見させて戴きたいと存じます。一枝様によろしくおつたへ願ひ上げます。先は御礼まで。

草々

十二月六日

網野 菊

池田小菊様

②は、小菊が作品集『奈良』を網野菊に贈った際の礼状である。

作品集『奈良』は昭和十八年九月、全国書房より出版された。装丁は初版は飯島貞子、再版は杉本健吉である。初版は「甥の帰還」「鳩」「縁」「奈良」の順で四作が収められている。昭和二十一年

の再版では「鳩」「鹿造夫婦」（「甥の帰還」の改題）「縁」「奈良」の順に、字句修正及び再構成がなされている。「甥の帰還」は昭和十五年四月『文芸』に、「縁」は、昭和十八年五月『日本女性』に発表された「母の告白」を改題したものである。

③昭和十九年二月六日付差出人東京、麹町区四番町一ノ二網野 菊

御ぶさたいたしました。一枝様も御きげんよくおすごしでいらっしゃいますか？

昨年末の「東京新聞」に御作集の批評が出て居りましたが、その時直ぐキリヌキをお送りしたいと存じて居りました所、年末からずっと身辺多事でおちつかず、今までお送りいたしそびれました。もう、きつとすでおよみになったことは存じますが、念のため、おくればせ乍らお送り申上げます。

東京は、月一と、変化しつづあります。一年前とは大変な変わりやうです。

御健康祈り上げます。

一枝様によろしくおつたへ願ひ上げます。

二月六日

網野

池田様

これも作品集『奈良』に関するものである。右に触れられている批評は、昭和十八年十二月二十九日『東京新聞』掲載の伊藤整「本年度の小説に就いて（三） 戦記小説等」である。伊藤は、『奈良』について、「特にその中の「鳩」、「甥の帰還」等にある流露感の美しさによつて目出度い著作であると思ふ」と述べている。伊藤は「奈良」「縁」についてはあまり評価していない。¹⁰

④昭和十九年三月十日付差出人東京、麹町区四番町一網野菊ずっとおからだがおわるかったさうで、お見まひも申上げず、失礼いたしました。どうか、くれぐれも、御養生願ひ上げます。私もリウマチのなりはじめ、足が重く、また、今でも、少し重たいものを持ちたり疲れたりすると、足が重くなります。ハブ茶を毎日のんでゐますが、ハブ茶はリウマチその他によろしく、工合いいやうです。あなたも、お試みになつてみて下さい。コーヒーみたいで、少しものみにくくありません。

あなたは、東京へお移りにならなくて、よかったと思つてゐます。このとなり組の中でも、一家もくは女子供だけ疎開する人が出来て来ました。大分、切迫してゐるらしく、三月四

月がキケンといふ人もあります。この頃は、私も、防空演習にも、むしろ進んで参加し、はしごのぼりもしてゐます。よそへ行くにも、防空服装のまゝ行つたりしてゐます。

世田ヶ谷へも、この頃は中々伺へず、月一度伺のがやつとです。壽々子様も大分お元気とはいへ、まだ御入院中ですが、やはり、つい、お見まひに出そびれてゐます。往復時間がかかる上に、電車が非常にこむし、私は今一人ぐらして、留守にすれば、配給ものその他近所へ迷惑かけること多いので、外出が億劫になります。奈良は、自然の風光美しく、それに、なんと云つても農家がまだ近いしするし、いろ／＼とお気強いでせう。東京の今のなやみは、空襲の恐れと、食料問題です。今まで、余りに消費都市でありすぎたので罰があつたのです。この頃は、私も、箱や鉢に豆をまいたり、ニラをうえたり、この日当りのわるい、土のわるい庭に、どうしたら、少しでも野菜を出来させられるか、と、頭をしぼつてゐます。ほしひをこしらへたりして、万一のために備へてゐます。空襲を覚悟とはいへ、いざとなつたら、やはり、その悲惨さには、随分まるることだらうと思ひます。なるべく、気をしっかりもつよう、修養したいと思つてゐます。先頃はあなたにも、いろ／＼ゴタ／＼申上げて失礼しましたが、なんといい

網野

池田様

浅見淵さんがあなたの「奈良」ほめて居られた由、ひとから
ききました。

ても「若い日」を書き上げ得たのは、あなたのおかげだと、
感謝してゐます。あの時分、すでに東京空襲を覚悟してゐた
のですから、本を、ともかくも書き残し得たことは、私の幸
福です。私は、今、責任のないからだとすから、いつ死んで
もよく、むしろ、空襲で一と思ひに死ねばこれの方がいい位
なのですが、多くの家族、もしくは責任のある人達の心労と
いふものは、本当にお気の毒です。

どうか、お二人とも、おからだをお大事に、ながいきなさっ
て、御幸福におくらし下さるよう、と祈つてゐます。

もしまた、空襲に生き残つて、幸ひと再び平和の日にめぐり
合つて、ゆっくりと奈良でお目にかゝれることがあったら、
どんなにうれしいことであらう、さういふ日があるやうな気も
してゐます。

「冬来たりなば春遠からじ」これは、あいにく、敵英国の詩
人の句ですが、全く、このまゝで世が終るといふことはあり
ますまい。いつか、平和の春が来ることは確実です。その日
を希望して、今の烈しさを忍びたいと存じます。一枝様によ
ろしく。くれぐれも御健康を祈ります。嵐にまけずに、おち
ついて、御勉強のよう、と祈り上げてゐます。

三月十日

後述する康子の④の手紙の二ヶ月足らず後にあたり、壽々子の
入院が話題に出ている。空襲がいつ現実になるかという恐れと食
料事情の悪化の中で書かれた書簡。網野菊の「あき地」（昭和一九
年作）には、野菜の配給が、一年前は十分だったのに不足し始め、
隣組の組長の発案で空き地を畑にすることが描かれている。この
書簡の内容とまさに重なるものである。東京空襲は昭和十九年十一
月から本格的に始まる。網野の「初夜襲」（昭和二一・六『曉鐘』
）には、昭和十九年十一月二十九日夜の初めての空襲が描かれている。

『若い日』は、昭和十七年三月に全国書房より、女流作家叢書
2として、出版された。女流作家叢書は、六巻で、他は、1が池
田小菊『来年の春』、3が中里恒子『家庭』、4が壺井栄『石』、
5が窪川稲子『気づかざりき』、6が真杉静江『母と妻』。小菊は、
全国書房の女流作家叢書の刊行に、自作の執筆のみならず、労を
執っている。当時の小菊の手帳には、叢書に關しての依頼打ち合
わせのため、上京して訪ねたと思われる執筆予定者の住所が控え

られている。網野の「見学旅行」(『海』昭和四七・四 中央公論社)

には、「大阪の大きな紙商店主の国田家康(筆者注：田中秀吉)という人が女の作家たちのシリーズ出版を思い立った」と、女流作家叢書に関わるエピソードが述べられている。それによると、小菊は、網野に「校正が出て了ったあとから、大幅な訂正を申し込んでよこした上に、「こんな作品は時代錯誤」云々と書いてよし」。網野を憤慨させたという。そのため、「良子(筆者注：網野)自身は金田(筆者注：小菊)を親友とも思わず、沼田氏(筆者注：志賀)の弟子とも思わずに居るのだった」とも書かれている。網野に小菊への怒りを抱かせた『若い日』の出版であるが、ここでは、網野は出版できたことを小菊に感謝しているのである。感情の変化には明日をも知れぬ戦時下という事情が関わっているように、だからこそ、「本を、ともかくも書き残し得たことは、私の幸福です」という言葉には切実さがある。

⑤昭和三十六年二月二十二日付差出人東京、千代田区九段四ノ二網野菊(甥の手渡し)

おハガキ、今日、頂戴いたしました。甥は、今日(廿二日)の午後、出発いたします。日吉館に宿がとれました。近所のであれ少々お届けします。

お元気ない御様子で御案じ申上げて居ます。御心中、御察しします。

一様様の御病氣、御病中のことなど、お書きとめになったら、いかがですか？ さうすれば、また、お気の張りも出るのではないでせうか？ 私も、殆ど毎日のやうに、気が沈むのですが、皆、人間の運命だと思ひ、耐えねばならぬと自分をはげまして居ます。思へば、不幸な人だらけです。

御身、くれぐれもお大事に。

とりいそぎ。

二月二十二日

網野

池田様

昭和九年に小菊の養女として入籍した同居人の一枝は、昭和三十五年一月二十一日に癌性肋膜炎で死去する。一枝を失ったことは、小菊にとって、大きなショックであった。有田の資料の中には、一枝の死去を受けて、網野が打った弔電や、志賀康子、網野がそれぞれ送った香典の現金書留の封筒が残されている。網野の「さくらの花」(「さくらの花」昭和三五・七『群像』、「二 白い菊」昭和三六・一『別冊小説新潮』、「三 野辺おくり」昭和三六・四『挿

「花」は、昭和三十四年末から昭和三十五年春にかけての網野の周辺に取材した私小説だが、その中で、「奈良の知人で、よし子（筆者注：網野）と同年の婦人がガン再発で死んだりした。ピチピチとかた肥りした小柄な元気のよい人だったのに……」と、一枝の死に触れている。また、奈良女子大学寄託資料の中の網野の小菊宛昭和三十五年三月三十日付書簡は、「さくらの花」と重なる内容、表現を含んでいる。

四 池田小菊の網野菊宛はがきの一部

①昭和三十六年三月十一日夜付宛先東京千代田区九段四ノ二 網野菊様

甥子様にお手紙とお菓子をおことづけ下さいましてうれしく有りがたく存じました。あの日午后から会合に出るつもりでしたが、咳がぬけず痰も出るし頭もいたいで止めてねました。風邪があまり長引くので去年の微熱といふ、てつきり老人結核だとかんねんしました、くだものでも持つてお伺いしようと思ひながら。とうとう月末まで寝てしまい、やつと起きられるようになると、二階にいた裏の女子大生が自殺なんです。十一月に一人来て、十二月にその子のお友達がまた来て二人でにぎやかそうにやつていたのですが、あとに来た

文科生がどうも暗い感じで私が気になつて先の子に様子をきいたりしていましたその子がやつたのです。（未完）

前の網野菊の甥が持参した手紙の返信の体。一枝の死後、二階に兄妹の下宿人を置いたがうまくいかなかった。十一月に来た学生というのが、その後小菊の家に下宿し、小菊の最期を看取った米戸衛子さんである。自殺した学生は三回生から、四回生になるころであつた。このはがきは「1」となっており、続きがあつたと思われるが、以下は不明。

五 志賀康子の池田小菊宛書簡

①昭和十六年六月二十七日付（速達）差出人東京都世田谷区 新町二丁目三七〇志賀直哉印刷封筒による

入梅に入り毎日鬱陶しきお天気つきで御坐いますが其後御からだの御工合如何で御出で遊ばされますか御うかゞひ申上。升、こちら一同かわりなく先日直哉娘づれの東北の旅も大へんおもしろかつた由写真などうつして参りました網野様御旅行からお帰りになり早々お病氣遊ばしました其上水虫などで御なやみの由ほんとに御氣の毒で御坐いますとどんなにか御氣持悪く御出でかと御察し申上て居り升扱喜久子の事まだ網野様

に御めにかゝりませんので池田様からの御話はうけたまはりては居りませんが喜久子としては池田様がよい方だと御申頂いて居りますので自分の今までの事も網野様から池田様がよくおきゝいたしました事と存じますし先方様でもよく御りかい頂いて御えんがある様でしたら御進め頂きたいと申て居ります御本人様の御年も丁度およろしうだし今は御丈夫だと伺ひますしお子様はおいくつでいらせられまじやうか網野様にいろ／＼うかゞへばすつかりわかりますので御坐いまじやうが網野様も只今御病氣だといふし御心づかひ頂きますのはすまなく思ひますしいつぞや御手紙引こします時どこかへまざれこみました様でわかりませんのでまたおそれ入りますが御様子委しく伺ひたいと存じます実は私の妹の方から喜久子のえんだんの話御坐いますがそれは御本人のお年が五十四才とかお二人お子さんがありと申す事で池田様からのお話があると申て御坐いますので急にいそぐ様な御手紙さし上ますわけで申わけ御坐いません写真はとりましたがな／＼日がかゝりますので出来次第御送り申上喜久子は池田様がおすゝめ頂いて居る方なら其方の方自分の氣もむいて居りますので何卒よろしくいろ／＼の事御伺ひ致し度存じます網野様におめにかゝりました上で御返事申上まじやうと存じましたので

御たよりが延引致しましたあまりぐ／＼致して居りましてもうおよめ様が御きまり遊ばしませんかしら、よい御えんで御坐いましたらしやわせで御坐いますしどうぞよろしく御願ひ申上升御本人様の御からだの方すつかり御健康でいらせられますか其方が氣にかゝります近頃は御便の通りお娘さん多く男の方がお少い世の中で御坐いますから大勢娘もつて居りますとな／＼氣がかりで御坐いますすふだんは御ぶさがち勝手の時斗御たより申上御ゆるし／＼願上升かすえ様によろしく

さだ子

池田小菊様

②封筒欠(①とはば同期の志賀康子から小菊宛書簡。後半欠で①と同封されている)

御細々の御手紙おそれ入りましたお元氣にて網野さん方と御一緒にお歩き遊ばしました由大へん嬉しき心地致し安心致しました長い事御めにかゝりませず先日夢を見まして当方へおとまり頂きお羽織おもなく私のをおかし申上ましたためにて一そう御なつかしく相成りましたまだ網野様へは御めにかゝりませんが丁度私の留守に御出頂きましたのでまた其節

御ことづけの油えがたい品頂戴致し大へんおそれ入りましたなかく油を手に入れますには店へ早くから求めに行かなければなりませんやふく先日もなたね油を二合かつて参りました様な始末にて一そう有がたく御礼山々申上り扱ました喜久子の事いろくと仰頂きまして有がたく存じますまだ網野様から小野田さんの御話うかゞひませんがいづれ其御話はあらためて御返事申上り留女子の事網野様より御きゝ及びと存じますが其当座はづい分く涙斗出して居りましたおかげ様で留女子も只今は元氣に致して居り升 若山さんもういよく御当地御引上げになる事になり池田さんがづい分く御淋しく(以下欠)

③封筒欠(喜久子の結婚後、小菊がゆばを贈った返礼の手紙。昭和十六年十一月以降、恐らく十七年六月頃と推定される)

鬱陶しいお天気つゞきで御坐いますが御さわりいらせられませんか大へんおいそがしくいらせられました由近頃はお知らせもおよろしいらしく何よりく御よろこび申上り升こちらも只今は一同かわり御坐いませ直哉も先日中は大へんつかれよわりて居りましたが近頃は元氣になりました大抵此季節は皆からだのこたえる時季で御坐いましやう皆様がつかれた

く御申になります網野さんも御きげんおよろしく御帰りは遊ばされいろくと御話うけたまわりましたがほんとに御苦勞様の事で御坐います扱一昨日はゆばほんとに御めづらしい御品御送り頂きました久々でお味ひさして頂きました丁度昨日は里見様や松村夫婦など参り近頃は御馳走はなかく出来ませんが頂きましたゆばは池田様から御送り頂きました御ふいちようを致しました皆様とおいしく頂き妹の帰りに母へもお裾分致しましたがまだたのしみに頂くつもりでのこして御坐います御礼あつく申上り升扱佃茂のつくだに弟にたのみまして佃茂より送つてもらふ様たのみましたが自分が直接注文したので御坐いせんからどうなつたのかと思つて居り升此間も弟が参りましたのでたづねましたら御送りました様事申ますし失礼ながら一寸御伺ひ申上り 小野田さん御病氣がお出になつたそうで御坐いますね、お氣の毒な事で御坐います喜久子もおかげ様にて幸福に暮して居り升御母様も大へんおよろしい方なのでづい分よろこんで居り升づい分いろく御心配遊ばし頂きましたが私も苦勞がなくなりました 私も松村の妹がおりますので何につけても相談相手になりました姉妹がなかつたらほんとに淋しいと思ひ升末筆にておそれいますがかずえ様によりしく御申上り願上り

池田小菊様

先は御礼まで 草々

さだ子

一同よりよろしく

右の康子からの三通では、康子と先夫・川口武孝との長女・喜久子の縁談を、小菊が仲介していることが解る。

①の書簡中に「網野様御旅行」とあるが、網野菊は昭和十六年五月に、吉屋信子等と来寧。病んでいた小菊も法隆寺、当麻寺などへ同行する。この旅行のことについては、網野菊の私小説「見学旅行」(前掲)に詳しい。吉屋信子を古田安子とし、彼女が売れっ子で人々に持てはやされた様が描かれている。前述したように、小菊も金田好江として登場し、作中には次のような記述がある。

土地に古く住み、そして以前の教職関係で顔の広い釜田は支那事変以来物資欠乏で困っている東京人に、まだ此の土地では手に入る物、例えば揚げ油など、古田が欲しがあると、店の主婦に交渉してくれたりした。その代り、早速、又、相手は、古田に色紙の署名などをねだったが……

小菊の住居の家主は道をはさんで向かいの稲村油屋であるが、稲村家には、吉屋信子、真杉静江の筆跡のある書画帳が残されており、この昭和十六年の来寧の際に書かれたものと思われる。ま

た、②の書簡の「油」も、おそらく、小菊が大家に頼んで手に入れたものであったろう。①で網野の「水虫」についても触れられているが、彼女の「金の棺」(昭和二三・五『世界』)には、主人公い子が、水虫に悩まされる様子が描かれている。「精神的に疲労の烈しかった年はひどい、悪化して「両手のほうたいのため、髪も自分で結えず、帯も自分でしめられぬという有様」、「リントの上にガーゼをあてて油紙でおおい、そして厚いほうたいをまいていても、患部の粘液が外へ滴り出る」という症状の記述があり、かなり深刻なものであったことが窺える。

①の「直哉娘づれの東北の旅」は、志賀直哉の日記の昭和十六年五月二十七日に「夜十時五十分の汽車にて留女 寿々 万々 同伴奥羽旅行出発、午前吉岡達夫来て色々旅の注意、上野にも来てくれる、」とあり、六月二日までの旅であった。また、②の「留女子の事」は、志賀の長女留女子が昭和十五年五月に結婚したが翌年二月には離婚となってしまうことを指すと思われる。昭和十六年六月十二日の志賀の日記には「柳兼子さん留女子の結婚の話にて来る」とあり、これは、再婚の縁談であろう。留女子は昭和十七年十二月に柳宗悦・兼子夫妻の媒酌で、音楽家である土川正浩と再婚した。

一連の書簡の中心的話題である喜久子の縁談であるが、志賀の

昭和十六年七月三日付若山為三宛書簡(143番)に「女高師理科の先生小野田氏の事、池田さんとは別の方角からもう少し知りたいと思ひますが何卒出来る範圍で結構ですがお願ひします」とあり、七月七日付同人宛(143番)にも「小野田氏の事ありがたう、おかげで余程ハツキリした、然し池田さんが間接に通じた此方の事はヒキキのヒキ倒しで、実は正確な事でないと思ふ。身分云々がそれから出てゐるやう思ひます、」とある。翌日七月八日付同人宛(144番)では「小野田氏の事考へたが身体余り頑丈でないのだから、ちらの条件とは大分懸かくあり、此方もその方で自信持てず結局打ち切りにした方がいいといふ事に決めました、学者として気持のよささうな人でその点は惜しい氣もするが、實際問題として矢張無理と思ふ。」とあって、これで小菊の仲介した小野田の話は打ち切りになる。「奈良女子高等師範学校一覽」によると、小野田勝造は昭和四年奈良女子高等師範学校の動物講師となり、翌五年教授になる。昭和十八年は休職中になっている。康子の先夫の子・喜久子は、この後、康子の妹・松村の紹介で、昭和十六年十月二十六日、三井物産社員・村田昌治と三度目の結婚をするが、昭和十八年八月九日に三十三歳で死去する。

②の書簡では、画家・若山為三が奈良を引きあげることにについて触れられているが、若山の東京移転については、昭和十六年春

から夏にかけて、志賀の書簡にしばしば言及があり、先の喜久子の縁談についての若山とのやり取りにおいても、その話題の前後に、若山の東京の佳作について触れられている。

③は、日付が特定できないが、喜久子結婚後の梅雨時と推定され、昭和十七年六月頃とした。

以上、①②③の順序で、康子が小菊に書き送ったものと考えられる。

④ 昭和十九年一月二十四日付差出人東京都世田谷区新町二ノ

三七〇 志賀康子

(欄外) 一 枝様にくれぐれもよろしく御申上願(上升)

御文並に小包御うけとり申上ましたこん日上司様よりの御たよりで池田様おやすみ遊ばして御出でと伺ひ御見舞申上様と御案じ申上て居りました壽々子のことで気持おちつきませず御見舞も申上ずかへつて御心配頂く様なことになりました御心切様に遊ばして頂ききつとく早く全快致す事と存じますふかく 有がたく御礼申上上司様もほんとに御心切様に遊ばして頂いて居りほんとにく嬉しく心丈夫に思ひます御送り頂きましたお守は壽々子の方へもつて参ります先日病院へ参りました時によく申て参りました壽々子のレントゲンとりました結果一昨日直哉

病院へ参り伺つて参りました古いきずがちよいくと二つ御坐いますそうで今の内すつかり直しておかないともしい悪い結果をおこす様な事があるといけないからと大事をとりこの際すつかりかんぜんのからだにする様中江様でも大へん氣にして頂きまして此度の病院へはいりました胸の病氣だけは御坐いませんとだん言致しました位で伺ひました時は何にも言へない驚きましたがふだんもいたつて丈夫で御坐いましたしそんな病氣があるなぞ夢にもわかりませんでした然し大した事にならずわかりました事はしやわせで御坐いましただれでも少しは致して居るそうでそれがしらぬ間に直つてしまふ人が多いそうで壽々子もそうであつたかも知れせんし大した心配はないにしてもづい分／＼氣になり早く／＼丈夫なからだになつてほしいとそれのみ二月堂様へお願い致します中江様にもお氣の毒殊に孝男さんに氣の毒壽々子もかわるそうで御坐いますし氣をままない様に致して居り升留女子の方はおかげ様で今月が五ヶ月との事先方でも初孫で御坐いますので大へんたのしみ頂いて居り升いよく／＼おぢいさんおばあさんになり嬉しう御坐い升家の孫で御坐いますとえんりよなしにしじゆう見られますがどうもそうゆうわけにも参られそうも御坐いません先日直哉の此度座右寶から出ました暗夜行路御

送り申上しましたが御うけとり頂きましたか御うかがひ申上上司様へおあい遊ばしました節どうか／＼よろしく御申上頂き升度々にかきまして相変らず御礼延引致し御ゆるし願上升直哉よりよろしく申上しました

池田様

(五枚目欄外に「小包の中にお豆頂きおめづらしきおまめおそれ入りどうも少しとられたらしく御坐い升」とある)

豪華版『暗夜行路』(座右寶出版)は昭和十八年十一月刊行。留女子の出産が翌昭和十九年六月、従つて昭和十九年一月二十四日の便りであることがわかる。壽々子は昭和十八年十一月二十二日に中江孝男と結婚。直哉は本稿一章に紹介したはがきでもわかるように、④の書簡の直前、一月十一日まで九州旅行をしていた。昭和十九年一月三十一日付中江壽々子宛はがきには「氣胸うまくいつた由、よかつた。」という文面がある。

以上、康子の手紙は、疊語が多く用いられ、書き手の人柄、氣持をよく伝える手紙と言えるだろう。心のこもったこれらの札状からは、康子が志賀家の交際を円滑なものにする重要な役割を果たしていたことが窺える。

六 杉本健吉の小菊宛書簡

杉本健吉は戦前より奈良に写生旅行をし、戦後昭和二十四年から東大寺観音院で製作もしている。志賀は「杉本健吉君の絵」（昭和二二・一〇にシバタギャラリーでひらかれた「杉本健吉個展」のパンフレットに発表）で、挿絵などの「通俗作家」に終わらないではないという期待を語っている。前述したように、小菊の『奈良』の装丁も手がけ、天平の会の一員でもあった。

①昭和二十二年（推定）五月四日付はがき差出人鹿児島県屋久島にて杉本健吉

日本の最南端屋久島千米以上の山、樹齡千年以下は杉とはいわぬ、小杉といふ、五千年の三代杉。島とは思へぬ

黒砂糖を舐め過ぎて虫歯痛む 健吉

差出年は推定。はがきの値段が五十銭になるのは昭和二十二年四月からで、昭和十八年は普通はがきは二銭。昭和二十年四月にはがきが五銭に、昭和二十一年七月から十五銭になる。昭和二十三年七月からは二円になっている。杉本のはがきは、十五銭のものに三十五銭の切手を貼っているの、二十二年ごろと推定した。

②昭和二十六年八月二十二日付手紙差出人名古屋市中村区西米野町二杉本健吉

さきごろはお邪魔しました。婦人奈良の表紙同封します、婦人奈良の文字は朱色又は紫しふいしき（この方がいいかな）にしてみました。如何ですか、

八月廿二日 健吉生

小菊様

小菊は、昭和二十二年、奈良市婦人会初代会長に就任した。小菊の原稿「暴力手帖」によると、「戦後、それは二十二年新憲法実施の年の春先であった。占領軍政府民事部の指令で、日本女性独立記念事業というので、全国的に民主婦人団体が結成されることになったそうで、ここでも町の婦人達が、私をその団体に狩出そうとしてはたらきかけて来た。私は、長年住んでいても、土地に交際が少く、交際先もきまっていて、いわゆる町の婦人達とはあまり交渉がなかったの、そういうことを知らなかった。が、その団体の代表者は、戦争中日本軍国主義を支援し、指導地位に参加したりした経歴をもたぬ者。また、世界民主主義を理解する婦人、文化人であること。そうした資格条件が出ていたようである。」ということ、婦人活動に担ぎ出された格好になる。戦争

に耐え、文筆活動に専念しようとした矢先のことである。

小菊は、翌二十三年四月十三日に結成された奈良県婦人協議会の初代会長に就任するが、その機関紙が『婦人奈良』である。昭和二十三年五月から二十八年一月まで季刊で十九号発行されたが、現在のところ、創刊号、四号、五号、七号は未見である。婦人協議会の中に出版部をもち、婦人達独力で編集、配布、経営まで行った。編集責任者は小菊である。『婦人奈良』を一家団欒の話題提供にしたい意向から、子供の作品を掲載したり、自ら小説を執筆し、また、佐多稲子らに小説を書いてもらったり、童話を載せたりもしている。だが、何よりこの機関紙が品位を保っているのは、杉本健吉の表紙、冒頭には入江泰吉の写真、カットに杉本健吉・須田剋太をはじめ、「天平の会」のメンバーでもあった荒木寛、さらに宮崎太虚や飯島貞子の作品を入れ、挿絵を奈良師範教授の久保田忠利に頼んでいる点にあったと言えよう。それらの原画の一部は大切に保管されている。ややもすれば「活動報告」に終始しがちな機関紙にこれだけの配慮は小菊ならではのものではあろう。昭和二十六年十月には補助金や、寄付金によらない自分達の資金調達で念願の婦人会館を建てるなど、精力的に活動に邁進した小菊であるが、新旧知事の派閥争いに巻き込まれ、婦人会は分裂、せつかく建てた会館も取り壊しの憂き目に遭う。

おわりに

有田市文化福祉センター寄託の池田小菊資料のうち、書簡類を見てきた。書簡の年代は、昭和五年から三十六年までにわたるが、主には戦前戦後のものと言って良いだろう。プロレタリア文学全盛期を過ぎ、「札入」「奈良」を発表した昭和十年代前半は小菊にとって希望に満ちた時代であった。同門の網野菊が小菊の作品評を知らせてくれる書簡を、小菊は、本格的に作家として認められつつあるという思いを確認しながら読んだことだろう。時代は戦争に突入し、当時の書簡は、どれも、生活、生き抜くことの切実さと切り離せぬものとなっている。そうした苦しい時代を耐え、戦後ようやく文筆活動に打ち込もうとした矢先、婦人会活動に担ぎ出され、結果的に、このことが小菊の筆を折ってしまう。ここに紹介した書簡は、婦人活動家としての一面も含まれるが、主に小菊の作家時代のもものが中心である。志賀との確執も窺え、小菊を追うことで、志賀の性向がよりはっきりしてくるということもできる。

全国書房の為に尽力しながら、志賀の叱責を受けたり、婦人会で奔走しながら、結局は政治抗争により功績を認められなかったりというように、小菊は労多くして報われない人という形容が当

てはまる人物である。しかし、それは、逆にいうならば、報われずとも、自分の誠実を尽くし労を厭わない人物であったということであろう。今後、そのような彼女がどのような作品を生んだのか、残された作品の考察を課題とし、それには、また別稿を用意したい。

- 1 「池田小菊来てゐて留女子を教えてゐる 合課教授といふやり方の由」(大ニ五・二・四)という記述が志賀の日記に見える。志賀は「合科」を「合課」と書いているが、合科学習が話題を呼ぶ学習方法であったことが窺える。
- 2 未発表原稿「東京」の中にも同様の記述がある。
- 3 これは、買い手の都合でこじれて不成立になるというトラブルに陥る。志賀の書簡。(志賀康子宛 昭二・二・一五、同 昭二・一・一七)に、小菊が買い手の話を持ち込んだこと、買い手の方でもめた事が出てくる。池田小菊「奈良」の中に家の売却をめぐる出来事が詳しく書かれており、事実を下敷きにしていると思われる。
- 4 池田直氏は、小菊の甥大西鹿二氏の二男。鹿二氏は作品集『奈良』(本文既出)所収の「甥の帰還」(のち「鹿造夫婦」)のモデル。
- 5 田中秀吉は「岡本ノートの責任者だった」(増田周子氏「新文学」(全国書房)の大阪出版時代研究「大阪作家と編輯者との交流を通して」『日本近代文学』73 二〇〇五・一〇)という。用紙の確保に左右され
- 6 た戦時下の大阪の出版業について、氏の論から教えられた。志賀直哉が奈良を去った後、志賀をとりまいていた人々が「好日会」をつくり会合するが、日中戦争や太平洋戦争で立ち消えになる。そのメンバーが中心になって、戦後の昭和二十一年四月二十一日、「天平の会」をつくり、戦災を蒙らなかつた奈良を日本文化復興の基点にすべく雑誌「天平」を創刊する。第一回目の会合に集まったのは、小菊をはじめ上司海雲、入江泰吉、須田昶太、山川清、福岡隆聖、佐保山堯海、河合卯之助、茶谷半次郎、水島弘一、中村純一、大谷房吉、堀池春峰、黒田正利、杉本健吉、岩坂千尋、橋本都耶子、仲小路悦子、宮綾子、金子千鶴であった。
- 7 小菊のペン書き日記(昭和八年十月二十六日)の欄外に「七月十四日ダニの仔ども、テリヤ(メコ)を高畑へ見せに出かける、(志賀さん)と鉛筆書きで添えられているが、志賀の日記昭和九年七月十四日に「池田小菊テリヤを仔犬を連れて来る」とあることから、姉とよの死(昭和九・四・一三)前後から犬を飼い始めたと思われる。
- 8 この評は、雑誌ごとに評を加えるスタイルで書かれている。「札入」について、「この女流作家の堅実沈着の力量手腕には敬服した」とし、『改造』の同号に載つた秋声の「戦時風景」を別として、「今月最高の佳作」と述べている。
- 9 飯島貞子は、奈良女子高等師範学校の家事科選科を昭和三年三月卒。画家。『婦人奈良』にも挿絵を提供している。

10 伊藤は、「塙」「甥の帰還」について「洗ひつくしたやうな明晰な

る研究成果の一部です。感謝いたします。

筆は、女性の作家としてのやさしさのある極点まで持つて行つた結果なのかも知れない」と述べている。一方、「奈良」「縁」の

——つるまき かつじ・本学教授

——よしかわ ひとこ・本学専任講師

二つは、描写対象が作者から離れてしまはずに従つてその作品の世界を確立し得てはゐないやうに思はれた」と批判している。ちなみに、池田直氏所有の小菊関係資料の中に、昭和十五年四月、小菊が病床で友人から寄せられた作品評の切り抜きや、はがき、手紙の一部を貼り付けたアルバムがある。その大部分は「甥の帰還」評であり、「甥の帰還」は、発表当時注目されていた。

11 『来年の春』の末尾の広告ページには、今後の刊行予定として、森田たま、林芙美子の名前も挙がっている。

12 通信文の内容は「ツッシンデアイトウノイヲヒヨウシマス」(昭和三十五年一月二十三日付)

付記

・志賀直哉の文章・書簡類の引用は『志賀直哉全集』(全二十二巻、岩波書店)による。

・数々の貴重な御教示をいただきました武田好昭氏、資料の閲覧に快く応じて下さり御協力賜りました池田直氏、有田市文化福祉センターの西岡巖氏、写真を撮影していただいた杉本工氏にこの場を借りて、心より御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

・本稿は、「平成17年度科学研究費補助金基盤研究一般(C)」におけ